

## 巻頭言

## 人間という愚かな存在



会長 山崎 學

台風19号は、日本列島、とりわけ東海、甲信越、関東、東北地方に大きな爪痕を残した。台風15号で大きな被害を受けた千葉県を中心にさらに被害が広がっている。

群馬県でも土砂崩れによる被害で死傷者を出し、河川の氾濫で避難所に避難するよう退避勧告が出された。しかし、他県に比べて被害が少なかったのは、民主党政権で「コンクリートから人へ」のスローガンのもと象徴的な事業として建設が凍結され、自民政権で凍結が解除され完成した八ッ場ダムのおかげといわれている。10月1日から「試験湛水」を開始した結果、当初の目標では3～4カ月かけて常時満水位にする予定が、10月12日～13日に降った雨で約7,500万立方メートルの水が流れ込んでほぼ満水状態になったと新聞で報道された。もしダムが稼働していなくて、これだけの水量が下流域に流れていたとしたら、大きな災害を引き起こす事態になっていたはずである。八ッ場ダムの治水効果が示されたにもかかわらず、民主党政権時の執行部は相変わらず否定的な発言を繰り返すだけで、反省の色がまったくみられない。舌鋒鋭く公共事業を切り分けた女性議員のコメントを聞きたいところだが、都合が悪くなるとダンマリ戦術を決め込むのは彼女の常套手段のようである。

9月23日に行われた国連「気候行動サミット」でスウェーデンの若き環境活動家(?) グレタ・トゥーンベリのスピーチが大きく報道された。報道によると、環境汚染映画にショックを受けた彼女は摂食障害に陥り、医師にアスペルガー症候群の診断も受けたという。やがて環境問題について学び、2018年8月20日から毎週金曜日に授業を休んで国会議事堂前に座り込むといった抗議活動を始めたことが共感を呼び、2019年9月20日には世界中で160カ国、400万人以上がデモに加わったという。国連の会合に参加するために太陽光パネルや水中タービン発電機を搭載したヨットでニューヨークを目指したが、スタッフは空路で渡米し、船長も飛行機で帰国し、カナダでデモに参加した彼女が母国にどのようにして帰国したかといった報道はない。

一方、日常生活ではプラスチック製と思われる食器に囲まれて楽しそうに食事をしている彼女の写真がアップされている。牛のゲップがメタンガスを含み、飼料を栽培するために森林伐採が行われているので牛肉は食べないと主張するが、牧畜を生業にしている人々は世界中にごまんといふし、ベジタリアン、ヴィーガンは個人の食生活の選択である。自分の考えを相手に強要する一神教的な押しつけはされたくないし、国連といった公式の場でキレまくる様子は映像を見て気持ちのよいものではなかったが、なぜか日本のマスコミは総じて高く評価していたのが興味深かった。

環境問題を考えるときに、要因となるものを単純に切って捨てるのは簡単である。地球をこれ以上汚染させないようにすることは大事であるが、多くの環境活動家がいうほど物事は単純ではない。原子力発電をクリーンエネルギーに変えていく段階で、どうしても化石燃料による発電に頼らざるを得ない。1,022万人が住むスウェーデンモデルが、数億の人口を抱える国に当てはまらずがない。援助もしないで、発展途上国に化石燃料に頼る発電をするなどは誰も言えない。

パリ協定で削減目標を決めた二酸化炭素排出量にしても、2016年の数値になるが、中国28%、アメリカ15%、インド6.4%、ロシア4.5%、日本3.5%、ドイツ2.3%、韓国1.8%、カナダ1.7%、インドネシア1.4%、メキシコ1.4%、ブラジル1.3%、オーストラリア1.2%、イギリス1.1%、イタリア1.0%、フランス0.9%、その他28.5%で、総量約323億トンである。全体の半分近くを占めているアメリカ、中国が参加していないパリ協定の実効性には前から疑問を感じている。地球の大気組成は窒素78%、酸素21%に対してCO<sub>2</sub>は0.04%にすぎない。そもそも地球温暖化に対する二酸化炭素悪玉論については懐疑的な議論がある。産業革命後の温暖化を化石燃料使用に原因を求めた「ホッケースティック曲線」の生みの親であるペンシルバニア大学のマイケル・マン教授は、グラフを批判したカナダの研究者を名誉棄損で訴えた裁判で敗訴している。

口先だけの核軍縮でノーベル平和賞を受賞したオバマ大統領。同じくノーベル平和賞を受賞したゴア・アメリカ元副大統領は、気候変動の原因を温室効果に結びつけて排出権ビジネスをつくった。さらにロヒンギャの民族浄化に目をつぶっていてもノーベル平和賞が転がり込んできたアウンサンスーチー氏。彼らを見ていると、世界中に魑魅魍魎が跋扈しているとしか思えない。人類は滅亡に向かって定向進化しているのかもしれない。